「確認しよう（中二・三年用）」文学的文章の読み（中学校国語）

　浩二の家は、町外れの山のふもとにある。山といっても一つではなく、いくつもの山々が手前から奥に連なったものである。その一番奥にあるのが「東の」と呼ばれる山で、その峠を越えると、次の町に行ける。

　浩二は幼いころから、山の木々や小動物、川のせせらぎを遊び相手とした。中学三年生になり、幼い遊びを卒業した今でも、折々、山に登り、ひと息つくのが習慣となっている。

　昔は道だった山道も、浩二が小学校を卒業する頃には、立派に整備され、アスファルトの道となった。アスファルトの道になっても、道を囲む山々は、ウグイスが鳴き、セミが合唱し、ときにウサギやイタチが姿を見せる豊かな自然のであることに違いはなかった。

　中学生となった浩二は、東の峠に向かって歩く息抜きを「散歩」と言った。…とは言え、その道のりは「散歩」という優しい響きには程遠く、往復八キロメートルほどにもなる。それでも、山育ちのえられた足腰は、その「散歩」を苦もなくするのである。

　「散歩」道は、緩やかな登りから始まる。川に沿ったアスファルト道は、左右にうねりながら続き、うっそうとした竹林を抜けたあたりから、徐々にがきつくなってくる。その急な坂道は大きく右へ回りこみながら進み、ホタルが多く見られる川岸をまたいで、左へと続く。その後、しばらくまっすぐ進んだ坂道は、最後に右へ半円形にして、東の峠へするのである。

【講評】

　夏の暑さが通り過ぎ、秋の気配を感じ始めた、ある休日のこと。その日は、朝から晴れ渡り、絶好の散歩であった。休日にもかかわらず、早朝に目覚めた浩二は、山の風景を思い描きながら、そそくさと食事をとった。

母にひと言、「行ってきます！」と告げると、き慣れた運動靴のひもを強めに結び、玄関の扉を開けた。

浩二の「散歩」は、家の近くの小さなへあいさつすることから始まる。安全をするわけではないが、山の神様に、自然をすることのできる感謝の気持ちを伝えたいからである。

さわやかな朝風に背中を押されながら、浩二は遠くに見える東の峠の誘いに応じる。歩き始めは、呼吸を整えながらじっくりと進み、いつものリズムに乗ったらスピードを上げていく。川沿いの道はあっという間に後方へ流れ、竹林に囲まれた道へと進んだ。

「ホ、ホ、ケキョ…。」

まだ練習中なのだろう、若いウグイスがたどたどしい声で語りかけてくる。浩二はで鳴き返す。

「ホー、ホケキョ。ケキョ、ケキョ、ケキョ…。」

|  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- |
|  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |
| 50字 |  | 30字 |  |  |

浩二の年季の入った鳴き声は、若いウグイスをする。すると、すぐまた若いウグイスが鳴き返してくる。で調べたところによると、この鳴き声は、ナワバリを守る意味があるそうだ。若いウグイスと二～三回やりとりしているうちに、竹林を抜けていく。

　急な坂道が川をまたいで続いても、浩二のは、何事もなく体を前へと進めていく。山の木々がし始めたことを教えてくれるのは、そこかしこでパリパリと乾いた音をたてる落ち葉であった。

　上り坂が大きく右へ回りこみ、東の峠が間近に迫る。手を伸ばせば頭上の青空に届くように感じる。徐々に速度を落としながら、一歩一歩、確かめるように歩みを進め、峠のてっぺんに立つ。

表現から感じたこと

「…東の峠だ。」

　浩二はそうつぶやきながら、そこから自分の町の景色と、隣町の景色とを交互に眺めた。大きく深呼吸をしながら、ポケットのタオルを取り出し、汗をぬぐう。や首まわりの汗は、山の涼しい空気に心地よく冷やされている。歩き始めてから四十分ほどのことである。

　たまに車が横を通っていくが、不思議なもので、排気ガスはほとんど気にならない。周囲の山々がすぐに吸い取り、しているように思えるからである。

　二、三度、足をさせた浩二は、来た道をたどり始めた。この美しい山でなければ、この季節でなければ、そして、「今」でなければ感じることのできないの気が、自分の心を満たしたことを五感で理解したのである。（後略）

　※「浩然の気」…ゆったりと解放された心持ち

「散歩」による　（県教委書き下ろし）

この文章について、評論家の大江戸氏は、次のように講評をまとめています。

「豊かな自然を愛する主人公の清らかな心が、『散歩』を通して描かれています。作者は、自然の事物を擬人化することで、主人公（浩二）の自然に対する優しいまなざしを巧みに表現しています。」

問　大江戸氏の講評を参考に、読書レポートを作成します。右の【講評】の線部分「自然の事物を擬人化する」に当たる表現を一箇所抜き出し、その表現から感じたこと・考えたことを三十字以上、五十字以内でまとめなさい。

　表現（一箇所の抜き出し）